The Association for Northeast Asia Ragional Studies

第５分科会：文化・歴史

東アジアにおける韓国の大衆文化（韓流）

―その現状と展望―

金　　光　林（新潟産業大学）

はじめに

近年、東アジア諸国ではドラマや映画、ポップスなどに代表される韓国の大衆文化（ポピュラー・カルチャ）が人気を得ている。韓国の大衆文化を指す「韓流」と呼ばれる新造語が出現し、広まっている。ここでは、この新しい社会現象に着目し、東アジアにおける韓国の大衆文化の現状を調べ、これとほぼ同じ性格を持つアメリカの大衆文化、香港の大衆文化、日本の大衆文化の東アジアにおける受容過程と比較しながら、韓国の大衆文化の特徴と今後の展望を探りたい。

本発表に際して、調査資料をすべてインターネットから入手している。そのために大量の最新の資料を簡単に入手できた反面、資料の信憑性を充分に検証しにくい面もあるので、その点に留意しながら発表を進めていきたい。

１．東アジアにおける韓国大衆文化の現状

韓国の大衆文化は1990年代後半から上昇気流に乗り始め、ここ数年東アジア諸国で広まるようになった。韓国大衆文化のブーム（「韓流」）を引き起こしたのはドラマからである。1997年に中国のCCTVのチャンネル１で『愛とは何か』が放映され、高い視聴率を記録したため、他の幾つかのテレビ局で再放映された。その後、『星を我が胸に』『初恋』『さようなら我が愛』『医者の兄弟』『モデル』『トマト』『花火』『ホテルリア』『ひまわり』『イブのすべて』『秋の童話』『守護天使』などのドラマが相次いで中国の複数のテレビ局で放映され、一部は相当な人気を得たと言われている。

中国で人気を得た韓国のドラマは、やがて香港、台湾などの中国語圏、ベトナム、シンガポール、モンゴルなどの中国文化圏の国や地域でも上映され、中国同様好評だったと言われている。『初恋』はモンゴルでは視聴率90％（2001年）を超え、『秋の童話』は台湾で13週間視聴率１位（2001年）を記録したと伝えられている。

今年（2002年）に入っても、韓国のドラマ『冬の恋歌』『ガラスの靴』、韓国の時代劇『明成皇后』『商道』が台湾で放映されているか、または放映が予定されているという。『冬の恋歌』は香港でも大変人気が出ているという。日本では2002年に韓国のドラマ『秋の童話』『イブのすべて』『新貴公子』がBS日本テレビ、テレビ朝日、東京MXテレビなどから放映されるようになり、韓国ドラマの人気は東アジア全域に及んでいる。

ドラマに続いて、韓国の映画も近年東アジア諸国で好評を得ている。日本では94年に韓国の伝統芸能―パンソリに従事する一家の愛憎を描いた映画『風の丘を越えて ― 西便制』が話題になり、98年に恋愛映画『八月のクリスマス』が上映されて韓国映画のイメージを大きく変え、2000年に南北朝鮮の対立を背景にしたスパイ映画『シュリ』が大ヒット（観客が100万人を超えたと言われている）してから、『美術館の隣の動物園』『JSA』『ユリョン』『リベラ・メ』『イルマーレ』『リメンバ・ミー』『春香伝』『反則王』『チング―友』などの韓国映画が次々と上映されており、韓国映画が日本で広まりつつある。同じ時期、以上の映画

NII-Electronic Library Service

The Association for Northeast Asia Ragional Studies

が中国、香港、台湾などでも正式な上映、またはビデオとして出回り、その他にも韓国の映画『飛天舞』『武士』『猟奇的な彼女』が中国の若者の間で歓迎されたという。香港では『八月のクリスマス』が韓国映画のイメージを大きく変え、その後、『シュリ』『JSA』『猟奇的な彼女』などの映画の人気が高かったという。

また、ここ数年間、韓国映画は国際映画祭においても評価されるようになり、幾つもの映画賞が受賞し、映画祭に出品する映画も増えている。今年の5月に第55回カンヌ国際映画祭で林権沢監督の映画『酔画仙』が監督賞を受賞し、今年の9月には第59回ベネチア国際映画祭で李滄東監督の映画『オアシス』が監督賞を受賞し、同映画の主演女優ムン・ソリが「新人俳優賞」を受賞した。

ドラマ、映画に続いて、韓国のポップスも韓国大衆文化のブームに加勢している。アイドルグループのCLON、NRG、H. O. T、Baby voxの中国公演が人気を得、2000年2月のH. O. Tの北京公演には1万3千余名の観客が集まり、H. O. T、NRGのアルバムは中国でそれぞれ40万枚、20万枚以上売れたと言われている。以上の他のピンクル、S. E. Sなどのアイドルグループが中国、台湾、日本などで公演を行い、最近、日本では韓国の少女歌手BoAの活躍も目立つ。

ミュージカルにおいても、韓国の活躍が聞こえている。90年代に韓国の伝統打楽器パフォーマンス『サムルノリ』が日本と欧米で人気が集めていたが、近年は食堂の料理士らが繰り広げるエピソードと『サムルノリ』のリズムを結合したミュジカールパフォーマンス『NANTA』（乱打）が外国でも人気があり、すでに日本で数回の巡回公演が行われ、アメリカのブロードウェーにも進出することになったという。アメリカのブロードウェーでは、すでに韓国のミュージカル『明成皇后』が公演されたことがあり、日本でもこれまで『NANTA』以外にも、『地下鉄1号線』『ギャンブラー』『八万大蔵経』『春香伝』などのミュージカルが公演された。

以上のようなドラマ、映画、ポップス、ミュージカルだけではなく、オンラインゲーム、料理、ファッション、大衆小説なども東アジア各地で歓迎されていると言われている。この社会的現象がいわゆる「韓流」という言葉で表現されており、何か特定の分野での一過性の人気ではなく、それは大衆文化のほぼ全般にわたっており、確かに一つのブームとも言えるものである。

2．東アジアにおける韓国大衆文化の特徴

近年、東アジア諸国で韓国の大衆文化が受容されているが、東アジアにおけるアメリカの大衆文化、香港の大衆文化、日本の大衆文化の受容過程と比べてみると、韓国の大衆文化が受容される理由とその特徴を次のように指摘できる。

まず、東アジアにおけるここ数年間の韓国の大衆文化の受容は韓国社会の経済発展に伴う文化産業の発達に直接な理由があると考えられる。経済的発展によって大衆文化が文化産業として成立し、資本と技術の蓄積、人材の発掘と育成、積極的なマーケティング戦略などによって、韓国の東アジアで商品性と競争力を獲得していることである。

次に、東アジア社会全体の発展により、大衆文化に対する需要が高まり、多様性を求める傾向が強まるところに、韓国の大衆文化が一味違う特色を持って新鮮な感じで受け入れられていることである。最近の日本で上映される韓国映画は、ハリウッド映画、日本の映画とも違い、且つ派手なアクションも多く、観る楽しさがあるところが人々の関心を引き寄せている。東アジア諸国で人気が出ている韓国のドラマも若い男女の愛、家族問題などを主題とするものが多く、外国の人にも分かりやすい上に、純粋な愛と情熱的な人間関係が人々の心を捉えることが多く、近代と伝統がよく調和された社会というイメージが魅力的でもある。

NII-Electronic Library Service

The Association for Northeast Asia Ragional Studies

それから、韓国の大衆文化が東アジアにおいても特に中国語圏、ベトナム・モンゴルなどの中国文化圏で歓迎されている点も注目される。同じ東アジアにおいても、日本で韓国の大衆文化を見る目と、中国・香港・台湾などが韓国の大衆文化を見る目には温度差のようなものがあり、タイ・マレシア・インドネシアなどの東南アジアでは韓国の大衆文化が中国語圏ほど注目されていない事実を見ても、文化の共通性という要素が働いているように思われる。韓国（朝鮮）は歴史的に中国文化圏に属し、そのような背景が韓国の大衆文化を中国語圏・中国文化圏で受け入れやすくする一つの要因であろう。もちろん経済的・社会発展的差異があって、同じ内容も日本で反応がないものが、中国で反響を呼んだりすることもある。

3．東アジアにおける韓国の大衆文化の展望

これまで東アジアにおける韓国の大衆文化の現状と特徴を調べてみたが、東アジアにおける韓国の大衆文化の今後の展望についても簡単に触れてみたい。東アジアにおける韓国の大衆文化の受容はここ数年のことであり、韓国の大衆文化自体も流動性のあるものであるから今後の展開を簡単には予測しづらい。それでも文化産業の成長による技術とノウハウの蓄積、新世代の俳優・歌手の台頭と活躍、グローバル時代に合わせて海外との積極な交流と合作、政府の積極的な大衆文化振興策など韓国大衆文化が継続して発展する好条件が揃っている。東アジアにおける韓国の大衆文化の現在の人気には幾らか一過性のものがあるが、堅実に発展していけば韓国の大衆文化は東アジアにおいて独自の位置を持ち続けると考えられる。

文永・弘安の役と台風

卯田　　強（新潟大学）

蒙古は台風によって撃退されたというのが通説の様である。しかし蒙古軍とはいえ、文永の役では高麗軍が、弘安の役では高麗軍と南宋軍がほとんどであった。現在でも台風は中国の東シナ海沿岸や朝鮮半島に上陸することはめずらしくないし、もちろん当時の人々も海の気象については熟知していたはずである。渡海する軍事作戦上、風を読むことは必須であるが、ほんとうに台風に遭遇したのだろうか。

蒙古襲来の1回目は文永11年10月20日（1274・11・19）であった。晩秋には台風の発生は極めて少なく、発生しても日本を襲うことはめったにない。したがって、900艘といわれる大船団が海を渡るのには最も適した時期であったといえる。おそらく文永の役には台風がやってきたのではなく、蒙古軍が引き上げたのは別の理由だろう。

2回目は弘安4年閏7月1日（1281・8・16）である。前日夜より暴風雨が蒙古の4400艘14万人という途方もない軍団を襲い、船は破れ兵は溺れた。当時の様子を伝える文書から判断するに、あきらかに台風の仕業であろう。大暴風は北もしくは北西よりであったらしいから、このときの台風は、7月30日から7月31日にかけて、南九州を斜めに横断したかあるいは日向灘沿いを北上したかどちらかで、閏7月1日には中国地方西端を横切って日本海へ抜けたのに違いない。

NII-Electronic Library Service